

タキエさんをしのぶ

四十年以上ドイツに暮らし、日独交流を陰で支えた女性がいた。二年前に亡くなった多喜枝・ルジチカさん。当時(笑)。現地ガイドや通訳としてだけでなく、訪独した多くの日本人らの世話を無償で続けた。そんな多喜枝さんの思い出をつづった雑誌特集号「タキエさんがいた！」が発行され、命日前日の五日には横浜市神奈川区で「しのぶ会」が開かれる。

(門田直人)

無償でもてなし 日独交流陰で支え



①66歳の誕生日パーティーで、夫アレスさんと笑顔の多喜枝さん。約1週間後に亡くなった。2012年9月28日、ドイツで(ダニエルさん提供)
②長男ダニエルさん。手には雑誌「タキエさんがいた！」。東京都千代田区で



あす横浜で集い

枝さんはドイツの「肝っ玉母さん」だ。多喜枝さんは一九四六年、岡山県に生まれた。兵庫県の短大卒業後に渡独。七二年から無給の家事手伝いをしながらドイツ語を学んだ。チェコからの亡命者アレス・ルジチカさんと出会い、結婚。八五年にバイエルン州ノイマルクトで最初の「日本週間」を企画した。

「ドイツで亡くなり二年

席する。企画したのは、ソーセージの研修で訪独し、多喜枝さんと十年以上の交流があった横浜市神奈川区のドイツビール店主、丸山富仁さん(四)だ。丸山さんは「多喜枝さんは困った人を見ると『ごはん食べに来て』と気軽に話し掛ける人だったから、今回のような催しも喜んでくれるのでは」と話す。

丸山さん夫妻が責任編集

九九〇年に多喜枝さんと知り合った作家大島幹雄さん(六)も「困っている人を放っておけない。涙もろく、世話焼きで、食べることにネコが大好きな肝っ玉母さんだった」と、その人柄をしのんだ。

雑誌「アートタイムズ」11号「タキエさんがいた！」の問い合わせは、こぶし書房。電03(38823)0524まで。

「世話好きな人だった」

「クリスマスの日、駅にいた見ず知らずの日本人男性を自宅に連れてきた時には家族全員びっくり」

「バックパッカーや研修者など、おそらく二千〜三千人の日本人の面倒を見たのでは」。友人らが語る多喜

「クリスマスの日、駅にいた見ず知らずの日本人男性を自宅に連れてきた時には家族全員びっくり」

「バックパッカーや研修者など、おそらく二千〜三千人の日本人の面倒を見たのでは」。友人らが語る多喜

した雑誌「タキエさんがいた！」では、多喜枝さんの訃報にふれた友人ら四十一人が思い出をつづった。ドイツでの現地座談会はジャーナリストの故筑紫哲也氏の妹・筑紫俊子さん(ドイツ在住)がまとめた。多喜枝さんとは四十年前からの付き合いで、死去直前に言葉を交わした親友だ。

寄稿者の一人で、明治時代にドイツに渡った日本人サーカス芸人を追う旅で一